

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 友常勉 印

学位申請者 港 那央

論文名 長崎ベ平連の実践と思想——アジアとジェンダーの視点から

【審査結果】

港那央氏の博士学位請求論文「長崎ベ平連の実践と思想——アジアとジェンダーの視点から」について、論文審査と口述による最終試験（公開審査）の結果、審査委員会は、全員一致で同氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。

なお、事前審査は8月9日にオンラインで実施され、最終試験は、2024年11月4日午後2時から約3時間かけて、本部管理棟中会議室において対面で開催された。審査委員会は、友常勉（主査）、米谷匡史（主任指導教員）、上原こずえ、金富子（本学名誉教授、元指導教員）、平井一臣（鹿児島大学名誉教授）の5名から構成された。

【論文の構成】

本論文の構成は以下の通りである。

序章

第1章 前史—長崎ベ平連の結成まで

- 1.1 世界のベトナム反戦運動／1.1.1 ベトナム戦争の経緯と世界の反応
- 1.1.2 ラッセル法廷の開催と東京法廷／1.2 戦後日本社会運動史のなかのベ平連
- 1.2.1 ベトナム戦争に対する日本社会と既成組織の反応／1.2.2 ベ平連の結成
- 1.2.3 ベ平連の運動原則／1.3 長崎市のアジア太平洋戦争と戦後の平和運動
- 1.3.1 軍需生産都市としての長崎市／1.3.2 原爆の被害
- 1.3.3 戦後長崎市の平和運動

第2章 結成—主体としての女たち

- 2.1 佐世保闘争と長崎市のベトナム反戦運動／2.1.1 日放労長崎分会の動向
- 2.1.2 長崎市の労働組合の結集／2.1.3 佐世保闘争と被爆者運動
- 2.2 女たちの佐世保闘争／2.2.1 反戦意識の高揚／2.2.2 もう一つの佐世保闘争
- 2.3 長崎ベ平連の結成／2.3.1 「代表」は誰か／2.3.2 日放労長崎分会との関係

2.3.3 結成期の運動

第3章 展開—長崎ベ平連の実践と思想

3.1 機関紙『長崎ベ平連通信』の検討／3.2 長崎ベ平連の実践／3.2.1 拠点

3.2.2 活動内容／3.2.3 他のベ平連・組織との共同行動／3.3 長崎ベ平連の思想

3.3.1 戦争の記憶／3.3.2 原爆の記憶／3.3.3 ベトナム戦争の衝撃

第4章 画期と限界—「主婦」と「市民」概念のジェンダー的再考

4.1 ベ平連の「市民」概念の二面性／4.1.1 ベ平連の「市民」概念の再検討

4.1.2 「包摂」と「排除」の力学／4.2 主体となった「主婦」たちの思想

4.2.1 近代家族の成立と「主婦」の増加／4.2.2 長崎ベ平連の「主婦」たち

4.3 「主婦」が振り返る長崎ベ平連／4.3.1 事務局の「主婦」の生い立ち

4.3.2 機関紙を読み返す／4.3.3 長崎ベ平連の限界

第5章 継承—「加害の論理」を中心に

5.1 ベ平連の運動原則再検討／5.1.1 非暴力の原則／5.1.2 運動論の再検討

5.2 長崎ベ平連における「加害の論理」の展開

5.2.1 大村収容所解体闘争と朝鮮人被爆者問題解決運動

5.2.2 加害・被害の二重構造の視点と核廃絶運動／5.2.3 「アジアの問題」の継承

終章

参考文献

【論文の概要】

本論文は、1968年1月末に長崎県長崎市で結成された、地域ベ平連の一つである長崎ベ平連に焦点をあて、主に機関誌『長崎ベ平連通信』などの資料分析とオーラル・ヒストリー（以下、OH）の実践をとおして長崎ベ平連の実践と思想を明らかにしながら、長崎ベ平連の運動をアジアとジェンダーの視点から捉えることを目的とするものである。

長崎ベ平連は、長崎地区の労働組合の影響を受けた若い女性たちを中心にして結成された。また長崎市は第二次世界大戦において原爆を投下された被害をもつ地であり、その経験が長崎ベ平連の運動の根幹の一つをなしていた。同時に、戦時中は軍需生産都市としてのアジアへの加害の地であり、それは原爆投下の要因でもあった。かくして長崎ベ平連の運動は被害に基づく運動であると同時に、アジアへの加害と向き合う運動でもあった。そ

ここで本論文は、長崎ベ平連の運動に注目し、ベ平連の運動全体をアジアとジェンダーの視点から問い直し、同時に 1960 年代の運動史研究と記録化の必要性という課題に応えることも目的としている。

ベ平連の運動は国際的なネットワークを有し、連帯を実現してグローバルな運動を展開した。そこで、国際的ネットワークを有していたベ平連の全国的な動向に対して、「地域ベ平連」の人びとがベトナム戦争を自身の問題としてとらえ、社会運動の国際性の条件を考察することも課題としている。

【審査の概要及び評価】

公開で行われた審査では、次のような成果と課題が指摘された。

(1) オーラルヒストリーの実践として

まず、地域ベ平連運動（福岡、神戸、沖縄など）では「地元の大学教員を中心に運動が展開されてきた」（11 頁）のとは違って、長崎ベ平連では地元の「無名」な「若い女性」により運動がはじめられ主婦たちが加わるなど、積極的な女性の参加とリードがみられたことを通して、彼女たちの運動への参加過程や心情を明らかにした。すなわち、具体的な地域ベ平連に光を当て、参加者たちの意識と行動を明らかにするとともに、活動の内容についても、オーラルヒストリーを積極的に活用しながら、資料をもとに明らかにした点が評価できる。全国に 300 以上あったと言われる地域ベ平連であるが、ベ平連神戸、福岡ベ平連、沖縄ベ平連など具体例についての研究はわずかであり、本論文は地域ベ平連研究を大きく前進させるものと言える。それにとどまらず、他の地域ベ平連の中心的担い手が男性の大学教員や学生であったのに対して、無名で若年層の女性が大きな役割を果たした長崎ベ平連という地域ベ平連の個性を描き出している点は高く評価できる。

さらに、運動体結成の直接的な契機はエンタープライズ佐世保入港阻止闘争だったが、運動の動機にベトナム戦争への加担者になることへの拒否感に加えて、被曝 2 世を含む長崎独自の被曝と運動という歴史的経験があったこと。とくに後者に関し機関誌分析や聞き取りを通じて、原爆の記憶や被害が長崎ベ平連運動の根幹をなしたことを実証した。

方法論について、単に文書資料の補完にとどまらず、オーラルヒストリーの対象者自身がインタビューのなかでの「現在の語り」と「過去の経験」を往復するプロセスを通して、運動当事者自身の「気づき」を引き出している点は、オーラルヒストリーの手法についての野心的な試みであり、港氏のインタビュー能力の高さを示しているものでもある。とりわけ女性の語りにみられる ^{subjectivity} 主体性 / ^{agency} 行為 主体性の差異などの論点をはらんだオーラルヒストリーが、闘争の場に投げ出されたままテキストとして提出されていることに意

義がある。

(2) ジェンダーとアジアについて

ジェンダーとアジアの視点で 60 年代後半のベ平連、地域ベ平連を考察するという試みも非常に高く評価される。とくにジェンダーの視点からの考察は、これまでのベ平連研究ではほとんど見逃されていたことであり、本論文の独創的な部分である。とりわけ個人原理＝ベ平連の運動論が長崎ベ平連でどのように展開したのかを明らかにしている。つまり、個人原理は組合に所属しない女性が運動をする理由となり、例えば多様な世代と地域のさまざまな思想や背景をもつ人々が事務局に出入りし食事をともにする「アットホーム」な事務局がつくられたが、それは食事作りを担う「主婦」への負担は不可視化され経済的限界の一因になったという両義性を明らかにした。

アジアへの「加害の論理」形成については、ベ平連運動から視野を広げた長崎ベ平連独自の地元の問題として大村収容所解体闘争と朝鮮人被爆者問題解決運動が展開され、その後も継承されていくとともに、ラッセルと交流があったメンバー岩松繁俊を通じてラッセルやラッセル法廷の影響から日本の侵略戦争への自己批判（加害責任）という独自の思想展開があったことを明らかにした。

すなわち、先行するベ平連研究の対象が「東京×知識人×男性」だったことに対し、「地域×無名×女性」による長崎ベ平連の特徴を提示した点（終章）は大きな成果である。また、その女性たちの歴史的な存在形態（不安定な非正規雇用、近代主婦）が運動展開上の制限にも関わったこと、ベ平連運動内外における性別役割分担とそれによる運動の限界についても明らかにしたということである。

夫は反戦、「主婦」はベ平連という運動上の性別役割分担がみられたこと、女性を守るべき存在とみなす「パターナリズム」の表出によってエンプラ闘争参加への女性参加が制限されたこと、さらにベ平連運動上の性別役割分担はなかったが、内部の私的領域では食事作りとその会計が無条件に「主婦」に任されたこと、機関誌の投稿で「一人の人間として」ベトナム戦争に反対したにもかかわらず夫により示唆され「一人の主婦として」が強調されたなど、当事者も当時は言語化できなかった運動上の日常のミクロに宿り作用するジェンダーの力学を明らかにした。

4 章では、ベ平連運動の「市民」概念に「階級、階層、年齢、男女関係のない平等・対等の思想」を読み込む先行研究に対し、小田実執筆の「呼びかけ文」に登場する女性は「おかみさん」つまり「主婦」だけであること、さらにジェンダー視点から長崎ベ平連の女性たちの関わりから「市民」概念の包摂と排除の力学を考察した点も評価できる。

長崎ベ平連の結成時には、NHK 長崎反戦のデモへの参加を女性ゆえに排除された女性

たちにとって、非暴力を原則とした個人原理のベ平連はオルタナティブな運動体になりえた（包摂）が、その長崎ベ平連でも背景にあるセクシズム（排除）が「市民」概念で一括りにされ不可視化されてしまっていた。「主婦」に関しても、機関誌での投稿で「主婦」が強調されたが、その主婦が仕事をもっていないゆえに、「市民」という自覚がなかったこと、さらに呼びかけ文にみられるベ平連運動の「市民」概念には、女性＝「主婦」というアンコンシャス・バイアスがあったのではないかという指摘など、ジェンダー視点からベ平連の「市民」概念を再検討し、そのジェンダーバイアスを示していることである。

(3) ラッセル法廷について

最後に、ラッセル法廷に関して「運動としてはそれほど盛り上がったようには思えない」（道場親信）という先行研究に対し、3章では長崎ベ平連機関誌でのラッセルやラッセル法廷への言及があり内部で活発な議論が行われていたこと、5章ではラッセルと交流をもちその思想を研究していた長崎ベ平連メンバーの研究者・岩松繁俊の思想と活動を検討したことで、ラッセル法廷と長崎ベ平連運動とのつながりを具体的に明らかにし、先行研究の再検討に一石を投じた。

以上を通じて、地域ベ平連の一つとして長崎ベ平連の全体像と特徴を明らかにし、ベ平連運動全体の解明の一端を担った。

ただし、以下の課題が指摘できる。本論文におけるジェンダーの視点からのベ平連の分析は高く評価できるものの、なぜ長崎ベ平連では女性たちが中心的な担い手になったのかという点が必ずしも明らかではない。論文では、ベ平連の「市民」原理が、女性たちが長崎ベ平連に参加する際のハードルを低くしたとあるが、なぜ他の地域ベ平連では見られない現象が、長崎では起きたのか。これは「ジェンダーとアジア」の両方にかかわる論点でもある。

実際、ジェンダーの視点での分析した章（4章）とアジアの視点で分析した章（5章）が別々に論じられ、両者の関係性、交差性（インターセクショナリティ）が見えにくい。前者は主に女性への言動、後者は主に男性たちの言動への考察にとどまっている。例えば、5章では、大村収容所解体闘争に参加した女性の発言はあるが、その後の運動や思想への言及がなく、岡正治の朝鮮人被爆者に関する活動に代表させている。岩松に関してもしかりである。また、些細な点だが、「女性問題」としている節のタイトルは、「女性たちの手記から」とか「女性たちの問題意識とウーマンリブへの関心」などのほうが適切である。

加えて、運動内部に存在した「パターナリズム」の表出という結論は、一面で正当であるが、しかしまた組合内部の差別構造や権力構造にまで分析が及んでいない。2章の長崎ベ平連の「代表」問題、3章の『長崎ベ平連通信』の分析は、ベ平連の通念と地域組織の論

理の不一致、あるいはその利用主義があったことを指摘していて興味深い。ただし、これについては、資料読解上の誤読が指摘された（組織の連絡先の「気付」を「代表」ととらえている）。資料読解についてケアレスであったということだが、研究上の争点にかかわる重要な部分であり、引用にあたって注意が必要であった。

また、家庭が運動の場になったことと、そこにおける性別役割分業の存在の指摘は、生活空間の共同性という主題は、ただちに家父長制的性差別主義に解消されるかという争点となる。これについては、その差別構造の深刻さを把握すべきであるが、同時にまた「食」などの共同性が運動の拠点になるという側面も見べきではないかというやりとりが、審査委員のあいだでも交わされた。

(4) 「市民」および残された課題について

さらに、「市民」はどこにいるのか（小田実の定義である「私たちはふつうの市民です」）という論点である。1970年代以降の日本において、いわばポスト福祉国家において、〈市民〉は戦略的主体になりえるのか、それはラディカル・デモクラシーの主体／行為主体になりえるのか。長崎ベ平連の経験はそこに応える論点を提起しているか、という問いについても考える必要がある。最後に、非暴力と直接行動の関係、市民運動と新左翼運動の諸課題との関係、近世・近代、戦前・戦後に、アジアと深い関わりがあった九州・長崎の歴史・地理的な文脈のなかで、長崎ベ平連がどのように位置づけられるのか（とりわけ被差別部落、朝鮮人、被爆者）という論点についても掘り下げの必要性が指摘された。

公開審査では、審査委員の指摘および会場からの活発な質問に対して、港氏の応答は適切かつ誠実な受け答えであった。それは港氏の研究者としての確かな資質を裏付けるものである。

以上、いくつかの課題は残しているものの、その独創的な挑戦、先行研究を乗り越える調査と成果、そして学術論文としての完成度をふまえて、港那央氏の博士（学術）の学位授与は妥当であると審査員全員は一致して認めるものである。